

『朱の王子と守護の子育て』

著：真崎ひかる

ill：明神 翼

「……朱凰様、抱卵役をお連れしました。お通ししてもよろしいでしょうか」

朱凰様。それが、眞白の主君となる方のお名前。

緊張のあまり、頭がクラクラする。眞白は鳥籠を抱える手にギュッと力を込めて、入室の許可を待った。

「入れ」

室内から聞こえて来た低い声に、トクンと一際大きく心臓が脈打つ。

若い……二十代半ばの紫梟様と、変わらないお年頃だろうか。そういえば、乳兄弟だと話していた。

「……どうぞ、眞白。邪魔者の俺は、ここで失礼します。お二人で交流を深められますように」

「え……紫梟様っ」

戸惑う眞白の背中をそっと押した紫梟は、耳元に唇を寄せて「怖がらなくていいよ」とコソソリ吹き込んでくる。

驚いてパッと顔を上げた眞白に、茶目っ気たっぷりに笑って「それじゃあ」と手を振ると、廊下を歩いて行ってしまった。

ぽつんと残された眞白は、鳥籠を抱えて立ち竦むばかりだ。

戸口に立っている眞白が、いつまでも動かないことに焦れたのか、室内から苛立ちを含む声が聞こえて来た。

「なにをしている。いつまでそこに突っ立っている気だ」

「あ……失礼しましたっ。お邪魔します」

王族に対する礼儀作法など知らないのだから、どう振る舞えばいいのかわからない。

失敬な態度だろうと思いつつ、頭を下げて廊下と部屋を遮っている薄布をくぐった。

うつむく眞白の目には、石造りの床に敷かれた豪華な織物と……自分が抱えた金色の鳥籠しか映らない。

「名は」

「眞白、です」

「俺は朱凰だ。……顔を上げろ。俺を相手に畏まる必要はない。敬われるような存在ではないし、堅苦しいのは嫌いだ。無用に遜った態度を見せられると、イライラする」

「……………」

王子という位から想像していたより、尊大な雰囲気ではない。

紫梟が言い残した、「怖がらなくていいよ」という一言にも勇気を得て、ゆっくりと顔を上げ

る。

スラリとした長身の男性が、庭に面した大きな窓を背に立っているのがわかった。空を茜に染めた夕陽が窓から差し込み、その人の髪を紅く染めている。

まるで、太陽を吸い込んだような美しい髪だ……と、ぼんやり見詰めている眞白に、一步……二歩と近づいて来る。

手を伸ばせば届きそうな位置で立ち止まったところで、夕陽の色を映していた紅の髪が、本来は艶やかな蜂蜜色だと知った。

王都に入ってからここに来るまで、金や銀や亜麻色……様々な色彩の髪を持つ人を目にした。

でもこの人の髪は、それらどんな人たちよりも美しい。十五糎ほど高い位置から、眞白をジッと見下ろす瞳の色は春に摘む茶葉からできる華やかな紅茶の色で、端正な容姿と相俟って幻のように儂く尊い姿形だった。

あまりの美しさに、言葉を失って見惚れる。啞然とする眞白を、至近距離からマジマジと見詰めていた朱凰が、ゆっくりと唇を開いた。

「見事な黒だな。染めているのではないのか？」

長い指先で前髪に触れられて、ビクツと肩を震わせた。幽玄な白昼夢を見ていたかのような心地で、忙しないまばたきを繰り返す。

「あ、僕……失礼なことを。髪も……瞳も、天然の黒です」

「で、名が眞白か。ふ……面白いな」

しどろもどろに答えた眞白に、朱凰は唇を綻ばせて微笑を浮かべた。

なにもかも真っ黒で醜いとか、不格好だと眉を顰めるのではなく……名前との対比を面白いと笑われるのは、想定外だ。

「悪くない。眞白。おまえは自分の役目をどこまで知っている？ 紫梟は、詳しく説明をしたか？」

朱凰が漂わせていた近寄り難い空気は、身分の高さだけが理由ではなく、整いすぎた容姿も一因だ。

それが、笑みを浮かべたことで途端に親しみやすいものへと雰囲気が変わる。旧知の仲のように「眞白」と呼ばれたことも相俟って、ドギマギしながら答えた。

「い、いいえ。紫梟様は、なにも仰ってくださいませんでした。お仕えする主君が、朱凰様とだけ……。あ、あと……この卵は、なんでしょうか」

「それさえ聞いていないのか？ ……はははっ！ だから、それほど無防備に抱えていられるのだな」

突然笑い声を上げた朱凰は、眞白が抱えていた鳥籠を手にとって、近くにある台の鉤部分に上部の丸くなっているところを引っかけた。

そうして鳥籠を掛けるためのものなのか、眞白の目の高さまである細い台は、全体が鳥籠と揃いの煌びやかな金色だ。

「この卵は……俺の守護鳥のものだ。王族は、自身の守護鳥の卵を手握って生まれる」

「守護鳥？ の……卵？」

王族が卵を握って生まれるということはもちろん、守護鳥というものも、初めて聞いた。きっと眞白は、よくわかっていない顔を隠し切れていないのだろう。朱凰の笑みが、ますます深くなる。

「本当に、なにも知らないのだな」

「申し訳ございません。辺境の村で生まれ育ったものでして……」

王都で生まれ育った貴族……眞白と共に審査を受けていた人たちなら、きっと詳しく知っている。

眞白はなにも知らず、わからないことばかりで、恥ずかしい。

そう恥じた眞白が足元に視線を落としたところで、朱凰が静かに口を開いた。

「それでいい。余計な知識を仕入れている人間は、厄介だ。俺の卵の抱卵役であるおまえが、貴族階級でなくてよかった」

貴族階級でなくてよかった、と……そんなふうと言われるなど完全な想定外だった。

そういえば紫梟も、知らないことは悪ではないと言ってくれた。

ゆっくりと顔を上げた眞白の前で、朱凰が鳥籠の小さな扉を開く。天鷲絨に包まれている卵を取り出して、「眞白」と名を呼んだ。

傍に立つのは失礼ではないかと思ったけれど、朱凰に呼ばれたからには従わないわけにはいかない。

……いいや。礼儀を間違っ失礼なことをしたら、その場でお叱りを受けるだろう。

そう開き直った眞白は、目の前に立ち塞がっていた『遠慮』という見えない壁を押し退けて、朱凰の傍に歩み寄った。

「手を出せ」

「はい」

促されるまま、両手のひらを上に向けて朱凰の前に差し出す。なにを思ったのか、無防備としか言いようのない状態の卵をそこに転がされて、慌てた。

「す、朱凰様っ。大切な卵なのは」

「そんなに青褪めなくとも、落として踏んだくらいでは割れん。守護鳥の卵は、ただの鳥の卵とは異なるものだ」

焦る眞白に反して、顔色一つ変えることなくそう言った朱凰は、ジッと卵を見下ろして「なるほど」とつぶやく。

眞白の手を覗き込む体勢になっているせいで、綺麗な顔が間近に迫り……心臓が苦しいほど鼓動を速めた。

「抱卵役が触れると、卵が応えるというのは事実なんだな。初めて目にした」

感心したようにそう口にした朱凰が見詰めているのは、ぼんやりとした朱色の光を纏う卵だ。

眞白も、自分の手のひらの上で不思議な光を放つ卵を凝視する。

触れている部分が、ほんのりとぬくもりを帯びているみたいで……生まれたての卵を手にした時に似た、奇妙な心地だ。

「その卵を孵し、誕生した雛を成鳥まで育てることが、おまえの役目だ」

ポツリと口にした朱凰に、驚いて「えっ」と目を瞠る。

朱凰の、守護鳥だという……この卵を、孵す？ そして、成鳥まで育てる？

「僕が……この卵、様……を」

戸惑いながら口にした眞白に、朱凰は落ち着いた調子で返して来る。

「卵に様付けなど不要。俺にも、必要以上に遜るなど言っただろう。堅苦しい人間に四六時中傍にいられると、息が詰まる。自然に振る舞い傅けばいい」

「四六時中……？」

いろいろと畏れ多いことを耳にした気がするけれど、眞白の耳に最も引っかかったのはその部分だ。

卵を孵すということについては、実家でも鶏や七面鳥の卵を孵化させたことがあるので初めてではない。この、朱凰の守護鳥の卵というものは鶏とは違うらしいが、それが役目だと言われれば肅々とお受けしよう。

でも、それがどうして「四六時中傍にいる」ことになるのだろうか……？

「守護鳥と俺は、一心同体だ。孵化の瞬間にも立ち会う必要がある。眞白が抱卵するのなら、俺が傍にいることは当然だろう？」

「は……い」

そう言われれば、そうかもしれない。

でも、朱凰は構わないのだろうか。秀でた芸があるわけではないし、特に見栄えがいいわけでもない眞白が傍にいと、疎ましいのでは。

「他に質問は？」

「あ、あのっ、卵が孵化して成鳥になるまでとは、どれくらいお仕えすることになるのでしょうか。僕が、きちんと卵を孵せなければ……どうなるのか、朱凰様は、不安に感じられないのですか？」

考えれば考えるほど、心細さばかり込み上げてきた。

眞白の不安は、顔に表れていたに違いない。朱凰が、ふっと表情を和らげる。

「成鳥までの期間は、鳥によって異なる。無事に孵化してみないことには、未知数だ。卵を孵せなければ……など、今のおまえが気にすることではない。俺の卵が、眞白を選んだ。それを信じている」

重圧を感じるなど、こちらを見下ろす朱凰の目が告げている。なにより、卵を選んだ眞白を信じている……と、素性もろくに知らないはずの自分に言ってくれたことが嬉しくて、泣きたいような熱い思いが込み上げてくる。

この人の期待を裏切りたくない。絶対に、託された卵を孵したい。

唇を引き結んで決意している眞白に、朱凰は廊下への出入り口とは別の戸口を指す。

「こちらの、続きの間を使え。旅をしてきたのであれば、疲れただろう。少し休め。必要なものはひと通り揃っているはずだが、足りないものがあれば紫梟にでも声をかけて用意させればいい」

そこで言葉を切ると、改めて眞白をジッと見下ろしてくる。

頭から……足元まで、マジマジと視線を往復させて短く息をついた。

「着替えもあるはずだ。寸法が合うかどうかは、わからんが。そのあたりも、不備があれば紫梟に言え」

「は、はい。大変な失礼を……」

上衣は真新しいものだが、父親から貰った作業衣は着古したものだと一目でわかる状態で……みっともない格好で朱鳳の前に立っているのだと、改めて思い知らされた気分だ。

恐縮してうつむいたところで小さく腹の虫が鳴き、恥ずかしさに頬を染めてますます身を縮める。

朱鳳は眞白の失態を笑うでもなく叱責するでもなく、「空腹か」とだけつぶやき、廊下に向かって声をかける。

「夕餉の準備を」

眞白から姿は見えないけれど、廊下に控える召し使いがいたのか、即座に「はい、ただいま」と返事があった。

眞白に向き直った朱鳳が、卵を天鵞絨の布に包み直して鳥籠に戻した。

「おまえが着替えているあいだに、食事の準備が整う。孵化の兆候が見えれば、夜中でも俺に声をかけろ」

「あのっ……」

この場で質問をぶつけてもいいものかどうか迷い、言葉を切る。

眞白が無知なことは、朱鳳も十分にわかったはずだ。でも、質問ばかりしていたのでは疎ましいのでは。

迷う眞白に、朱鳳はほんの少し眉根を寄せて続きを促す。

「疑問があれば、遠慮なく口にしろ。無知は恥ではない。知ろうとしないことのほうが、愚かだ」

その言葉にコクンとうなずいた眞白は、そっと顔を上げて朱鳳と視線を絡ませる。

身分の高い人の顔を、こんなふうに見ることは、きっと失礼なはずで……けれど朱鳳は、咎めることも目を逸らすこともなく眞白の言葉を待っている。

笑顔は少ないけれど、すごく優しいお方だ……と朱鳳の人となりを把握して、質問を投げかけた。

「孵化の兆候とは、どんなものですか？ 抱卵……って、肌身離さず抱えていなければならないのでは？」

「……そのあたりは、指南役に聞け。明日の朝には、呼集がかかる。着替えや湯浴みのあいだは、籠に入れておけばいいだろう」

「わかりました」

朱鳳も、詳細は知らないようだ。困ったように「指南役」の存在を口にして、金の鳥籠に収まっている卵をチラリと見遣った。

「では、失礼します」

続きの間に足を向けようとした眞白に、朱鳳が「ああ、眞白」と呼びかけてきて動きを止め

た。

「一つ、言い忘れていた。卵……いずれ孵る守護鳥の名は、朱璃だ。俺の名づけと同時に、守護鳥の名も決められる」

「承知しました。朱璃様ですね」

「様は不要だと言ったはずだ」

わずかに眉を顰めた朱凰に、「では、朱璃……と呼ばせていただきます」と返して、続きの間に足を踏み入れる。

朱凰の気配が遠ざかった途端、肩の力が抜けて足元に視線を落とした。自覚はしていなかったが、ずいぶん緊張していたようだ。

当然か。朱凰は決して威圧的な態度ではなかったけれど、気高い存在が間近にあるだけで気圧される。

なにもかも、これまで眞白が出逢ったことのある人とは違う。容姿も纏う空気まで、尊いばかりの綺麗なお方だ。

言葉の端々から伶俐な知性が滲み出ていて、王族とはこれほど高貴なものなのかと感嘆の息をつく。

ふっと顔を上げ……目の前の光景に、息を呑む。

「うわ……」

窓の外の夕陽はほとんど姿を消し、空に茜色の余韻を残すのみだったけれど、ぼんやりと視界を照らし出している。

薄陽でも、小ぢんまりとした部屋の全体図を眺めることはできた。

この小部屋は使用人のための控え室のはずなのに、眞白が三人の弟と共に使っていた部屋より広い。

床には繊細な刺繍が施された織物が敷かれており、足で踏みつけるのに躊躇う。

窓際にある寝台も……真ん中に寝転がって手足を広げても、きっと端に届かないくらい大きい。

「みんな……どうしてるかな。父さんや母さんの手伝い、きちんとしているのかなあ」

故郷の村を出て、約半月。夢中で王都を目指した。これまでは、前に進むことばかりに必死だった。

こうして身を落ち着けることができたので、ようやく辺境の地に残してきた両親と、弟や妹たちをゆっくりと思い浮かべる余裕が生まれて、独り言を零す。

「とりあえず、職に就くことはできたようだし……家には、手紙を出しておこうかな。いただいた支度金も、送りたいし」

村の家族には、王都に無事到着したと職に就けた旨を手紙に書いて送るとしても、王子の守護鳥を抱卵するという仕事の内容は、詳しく伝えないほうがいいかもしれない。卵の扱いから察するに、きっと、すごく重要な任務だ。

なにより、今日一日の出来事を手紙に書いて説明するなどできそうになかった。

目にするものすべてが、これまで眞白の世界には存在しなかったもので……それはきっと、家

族も同じだ。手紙に書いて説明しても、理解することは難しいだろう。

「抱卵……卵を、孵すかぁ」

王宮での仕事に就くという一番大きな目的は、果たすことができた。次は……朱凰の守護鳥の卵を孵すという役目を、きちんと果たさなければならない。

「朱璃……どんな鳥だろう。朱凰様があんなに尊い容姿の方なんだから、きっと守護の鳥も美しいんだろうなぁ」

灰かな朱色の光を纏っていた卵を思い浮かべ、ぼんやりとつぶやいた眞白は……まだ自分の役目の重要性を、真に理解していなかった。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>